

ともの家 だより

平成26年 秋・冬 49号
発行 社会福祉法人ともの家

過去の記憶（思い出）を大切にする ～運営基本方針より～

〒790-0101 松山市溝辺町甲 94

【Tel】 089-977-8502 【Fax】 089-907-8504

【E-mail】 tomo-home@triton.ocn.ne.jp 【Home Page】 <http://www.tomo-home.jp>



新年を迎えて

小規模多機能ホームともの家 渡邊研太郎

2014 年を振り返るとソチオリンピックやサッカーワールドカップの開催等、スポーツ界でも大きな大会が行われました。また、4 月からは消費税が 8%に上がり国民生活にも多少なりとも打撃を受けた方も多いのではないかと思います。

今年はともの家としても、また個人的にも大変悲しい、残念なお別れがありました。10 月 29 日の朝、前理事長永和良之助がご自宅でご家族に見守られながら息を引き取りました。職員一同、ご冥福をお祈りいたします。また、前理事長への感謝の気持ちと共にこれからも職員一人ひとりが質の向上を目指し精進していきますので、どうか見守って下さい。

今年も全事業所合同の敬老会や久万高原町にあるふるさと村への秋の遠足、年末には餅つき等、毎年恒例となった行事や昔から当たり前に行われていた季節の行事を利用者さんやご家族と共に楽しく出来たことに喜びを感じ感謝いたします。また、11 月には実践研究発表が行われ各事業所より特に力を入れて取り組んだ内容が発表されました。当日は、京都から施設職員と利用者のご家族やジェイマックスの職員も参加して下さい、外部の方にともの家での取り組みを知っていただくいい機会となりました。ともの家の理念に掲げてある「サービスの質は職員の質により保証される」このことを理解し、職員は自分が発する言葉遣いや態度、取り組み方ひとつでその日の利用者さんの気持ちや体調、生活までも変わってしまうことを考えて対応しなければいけません。

2015 年新しい年を迎え、各事業所で利用者さんと初詣に行ってきました。今年は一ツじ年であります。2015 年は 4 月に小規模多機能ホームのサテライトが開設予定であります。羊は群れたがる性質を持つと言われるのでともの家でも羊のように理事長を先頭に職員一丸となってさらに質の向上に取り組んでいきます。



敬老会



アンジュールともの家 高市美紗

9月15日、ともの家では敬老会が開かれました。ホーム長のあいさつに始まり、長寿番付、職員による寸劇、女形による舞いの披露、事業所紹介が執り行われました。

長寿番付では2名の方が表彰され、ともの家のご長寿トップには、アンジュールともの家のYさんが99歳で選ばれました。職員による寸劇では「金色夜叉」が演じられ、通常のストーリーに若手職員のアドリブを交えた演出で観覧者の笑いを誘いました。婚期を逃しつつある、お宮役の職員の「私の美貌は玉の輿に乗る価値があるはずよ！」の台詞からは鬼気迫るものが感じられ、その迫真の演技に会場はどよめきました。



昨年の敬老会でも披露された女形（職員）による舞いは、利用者さんにも好評で、「また、見たい！！」というリクエストがあり、今年も実現しました。美しい舞いに利用者さんも釘づけ、真剣に観覧され、拍手を送られていました。

各事業所による事業所紹介では、プロジェクターを使い、前回の敬老会から一年分、各事業所が歩んできた思い出を写真を交えつつ振り返りました。利用者さんはもちろん、ご家族や職員の笑顔に包まれ終わった敬老会。来年はどのような敬老会になるのか、今から楽しみです。

最後になりましたが、この一年、お健やかに過ごされ、敬老の日を迎えられました皆様にご心よりお慶び申し上げます。そして、いつまでも、ご壮健で心豊かな人生が過ごせますようご祈念申し上げます。



秋の遠足 ～久万高原町～

ともの家この道 乗松守亮

今年で三回目になる久万高原町ふるさと村の遠足へ行ってきました。去年は、少しタイミングが悪く紅葉の散りはじめた頃で、突然の雨の中、ゆっくりと見学をすることができませんでしたが、今年は天候も良く、綺麗な紅葉が私達を出迎えてくれました。ふるさと村では、みなさん思い思いに紅葉を見学されながら「綺麗やね～来て良かった」と楽しんでおられ、全員で撮った記念撮影も笑顔が絶えませんでした。見学をした後は待ちに待ったお昼ご飯へ。昨年もお世話になった「八丁坂」さんで、美味しいご飯をいただき、先

ほど見た紅葉の話して盛り上がっていました。
みなさん食欲旺盛でいつもよりも食が進まれる方もいて、今回の遠足をとっても楽しんでおられる様に感じられました。昼食後は、新しくできた道の駅にも寄りお土産を買って無事に帰宅。「また行きたいな～」と嬉しい言葉もいただき、また来年も四回、五回と続けて利用者さんをお連れすることができたら良いなと思います。



介護ひまなし日記⑤

小規模多機能ホーム第二ともの家 永和里佳子

リツコさんはリラの育ての親だった。

リラと言うのは、生後2か月の私の娘だ。第二ともをの家の管理者で介護支援専門員を兼ねている私は、産休が開けるとすぐに現場復帰しなければならず、幼子を抱えて困っていた。そんな時にちょうどリツコさんが第二ともをの家にやってきた。

リツコさんは、息子さんと男のお孫さんと暮らしていたが、家事ができなくなり男たちは自分たちのこと以外に無関心であったため、食べるものに困って朝早くから日が暮れるまで徘徊していた。そのうち畑の作物を荒らすということで地域に居られなくなり、めぐりめぐって第二ともをの家にたどり着いた。

脚が達者で、抜群の方向感覚を持っていたリツコさんは、「家に帰る」と出ていき、追いかけるスタッフを必死で振り切って逃げた。炎天下の中、3時間にわたるおいかけてっこをして最終的にパトカーに乗ってどうにか戻るということもあった。

リツコさんは、愛媛の山中にある小田村で育った。子だくさんの貧しい家庭で、父母を助けるために小さいころから子守をしていた。リラを見て、リツコさんは昔を思い出した。毎日、リラを抱っこして寝かせるのがリツコさんの仕事となった。眠るのを傍で見守り、片時も気を抜かなかった。誰かが赤ちゃんを触ると怒って自分の部屋に連れて行ってしまふ。首が座ってからはおんぶ紐で背中に負って散歩した。秋が来ると薄物を、寒い冬には真綿のねんねこ半纏を羽織って歩く白髪の老婆は町中でも噂になっていた。別の取材で来ていたNHKの記者は、「あんな姿初めて見た、時代劇を見るようだ」と驚いていた。

間もなく初めての春を迎えるころ、リラは負われるのには大きくなりすぎていた。動

きたくて、リツコさんの背中で暴れるようになり、リツコさんは手を焼いた。子別れの時期であった。リラは保育所に通うようになった。毎日、リツコさんとお迎えに行き、一緒に参観日にも参加した。初めての運動会では「これは私の孫よ」と誇らしげにリラを抱いていた。

子守の仕事がなくなって、そのうちリツコさんの徘徊が始まった。以前と違いここが「小田」となっていたため、必ず戻ってくる「周廻」になっていたが、「近所の人にもらった」と柿やみかんを取ってくるようになった。山菜や野の花まではよかったが、次第に歯止めが利かなくなり、忘れていた「作物荒らし」が心に戻ってきた。近所からの苦情により、リツコさんは再び地域に居られなくなった。ついてくる職員を振り払い、以前のように攻撃的なリツコさんになってしまった。

行動を抑えるために薬を服用するようになり、肝臓を悪くして入院した。自由に外に出られない病棟で治療するうち、リツコさんはついにすべてをあきらめた。退院後ご家族は施設入居を希望された。リツコさんが第二どもの家に帰ってくることはなかった。会いに行った私に、リツコさんは「子どもは元気か」とにっこりした。リツコさんと私は、リラを介して本当に家族のようにつながっていた。大きくなったリラに、お世話になったリツコさんのことを語って聞かせよう。胸にわずかの痛みを覚えながら、リラとともにお礼に行く日を遠くない未来に感じている



お別れ欄 ～ともに過ごした時間を忘れません～



【篠藤進さん 享年 84 歳 ともの家この道】

感謝そして合掌

篠藤敦子

父が脳梗塞を発症したのは7年前。肺の病気も併発してあちらこちらの病院を行ったり来たり。思うようにならない自身の体を受け入れがたく、食も細る一方。行く先の施設で人やシステムになじむのに本人も家族も不安を感じながら過ごしたものです。

縁あって『ともの家』にお世話になることになったのが5年前。ここでは、大好きな菓子パンとコーヒーを朝食として食べさせてもらえる。みんなと一緒にじゃなくてもいいんだと驚いたものです。(それまで嚥下機能の低下から誤嚥の心配があるからと飲み込みやすい物であることを最優先にした食事でした) 好きな物を美味しく食べさせてもらえることで食への意欲もでてきて食べる量も増え体重 up。次第に表情もおだやかになっていきました。

それから5年間。職員の皆さんには大きな力をいただきました。大好きな『長崎の鐘』

の歌も映画も共に楽しんでいただき、夜も淋しがって「オーイ、オーイ」と呼べば、幼い頃からの数えきれない思い出や記憶に気長につきあっていただきました。ここ最近家族にも見せない顔を見せていたようです。

ある日の介護計画書に『海を見に行く』とありました。釣りが好きだった父は職員さんと海で釣りをする話をしながら想像の翼をひろげていたのでしょうか。(NHKの朝ドラの名ゼリフではありませんが)寝たきりの体で唯一できる自由。夢をみる楽しみを大事に思ってくださっていると感じる嬉しい瞬間でした。

こんな穏やかな日がいつまで続くか。今年83回目の誕生日を迎えられるか。来年のお正月は?そんな事を思っていた矢先の7月末、突然の急変でした。私達家族は待たなしの状態の家での看取りを選択しました。それは延命の医療を拒否する事。元気な頃から尊厳死を口にしていましたがこの夏の暑い盛り。言葉もでなくなった父にとってこれで良かったのか。あと一日、もう一日命の火をつなぎとめたいとは思わなかったのか。とまどいの中での9日間でした。

死に至るまでの看取りの現実。不安な思い。私達家族も又職員の皆さんや訪問ドクターに支えていただきました。そして8日の朝、家族の当たり前の日常を感じながら妻に子に孫に見守られて息を引き取りました。今、遺影の中の父の表情はおだやかです。

困難な状況の中でもあの手この手で介護。心の安定の為に様々な試みをして下さったお一人お一人に心より感謝しております。本当にありがとうございました。

『父さん。もう拘束するものは何もないよ。好きな喫茶店にコーヒー飲みに行けるし、あの海にも行ける。曾孫が住んでいる姫路の家も見に行ってみる?そろそろ紅葉の季節だよ。モミジを見にドライブしようね。』



【白形和子さん 享年92歳 溝辺ともの家】

白形和子さんを偲んで

溝辺ともの家 高岡明子



少女のような女性でした。「キャー。クモがいたのよ。ねえ怖いわ。そばにいてちょうだい。」と涙目で訴えてこられたり、「お父さんが怒るのよ。私は悪くないのに〜。」とぼろぼろ涙を流しながら、おまんじゅうをパクリ。と満開の笑顔で「おいしい。もうないの?」と小首をかしげる白形さん。また息子さんと散髪から帰った時、笑顔で息子さんを送り出すと一転、頬をふくらませ口をとがらせながら「男みたい

でしょ。だから男の子はだめなのよねえ。」と手入れしやすいようにと短く切った髪を撫でながら大きなため息を吐かれた時は、その微笑ましさに思わず職員同士顔を見合わせ、笑ってしまいました。

さびしい気持ちでいっぱいになったら、まるでこの世の終わりとばかりにさめざめと涙する白形さんに、私たちも何とか元気になってもらおうと右往左往するのですが、そのさびしさを埋めて差し上げられず途方に暮れていると、タイミングよく息子さんが現れ、外出したり、窓辺にふたり寄り添って静かで優しい時間を過ごされました。そんなことが一度ならず何度もあり、その奇跡のような思いやりに、家族の絆の強さを感じたものです。その時の白形さんの優しくふんわりした笑顔は、今でも私たちの心に残っています。白形さんは時折「この船はいつ港に着くのかしら。そろそろ帰らないとお父さんが心配するわ。」とおっしゃっていました。長い船旅を終えて、今頃はご主人のそばで可愛らしく笑っておられることでしょう。ご冥福をお祈り申し上げます。優しい思い出をありがとうございました。

【森百十さん 享年 95 歳 小規模多機能ホームともの家】

親の死について

森 昇

人は生まれた所が一番とよく言いますが親父は 93 歳まで兵役を除いて、ずっと川内の田舎で暮らしてきました。ひたすら、その想いは強かったようです。

昨年縁あって、ともの家に入居することになってからも日曜日ごとに帰宅願望が強く、その願いを叶えることを子の役目として過ごしてきました。亡くなる前日も帰宅したことが子としてホッとするところであります。ありがとうございました。

Hさんを偲んで

アンジュールともの家 高市美紗



12月6日、アンジュールともの家の入居者、Hさんがお亡くなりになりました。退院直後の急変。退院後、これからの生活を思い描いていたところの出来事で、スタッフ一同、信じられない気持ちで一杯でした。誠に残念でなりません。

Hさんは平成 22 年 5 月にアンジュールともの家に入居されました。Hさんはゴルフやカメラ、ドライブなどが趣味のとても活発で社交的な女性でした。中でも写真撮影が大好きで、どんなに機嫌が悪くてもカメラを向けるとニコリと笑顔に、何処にいてもシャッター音を聞き付けると「撮ってくれますか？」といっちは我先にフレームイン。過去の写真を見返すとHさんの思い出の写

真がどっさりと出てきました。その一枚一枚がHさんの生きた証。写真に写るHさんの笑顔を見ていると私達の介護は間違っていなかったのかなと励まされたような気持ちになりました。外出や散歩がお好きで、ご自宅で猫を飼われていたこともあり、入居当時は、ともの家で飼われている犬の「シバ」を、よく散歩に連れ出して下さっていたそうです。年を重ね、歩行が不安定になってからも外出好きは変わらず。口癖は「何処か連れていってくれますか？」でした。スタッフに手を差し出し、手を握ると照れくさそうに、微笑まれるHさんの笑顔にどれだけ癒され、支えられてきたことか。春の花見、夏の遠足、秋の紅葉がり、冬の初詣、Hさんは私達にたくさんの思い出を下さいました。

Hさんにとって、ともの家で過ごした日々が有意義なものであったことを願います。Hさん、たくさんの喜びと思い出をありがとうございました。

ご家族の皆様、今まで、ご支援ご協力ありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



介護職員からのメッセージ



小規模多機能ホームともの家 中川久恵

食事作りのボランティアから始まり、食事作り+デイサービスの介護職員、キッチンスタッフ、第二ともの家の介護職員などパートの立場ではありますが、12年の月日をともの家で過ごしています。初めて溝辺ともの家を訪れた時、そこには2005年に発行された「やさしい時間—あるグループホーム暮らし」の写真のままの空間がありました。利用者さんの穏やかな笑顔とゆったりとした時間、職員の利用者さんへの尊敬のこもった優しく丁寧な言葉遣い。利用者さんが家のようなたたずまいと雰囲気の中で安心して暮らしているのを目の当たりにし、それまで介護施設に対し自分が持っていた概念を覆された思いでした。

88歳になる私の母は茨城で一昨年前まで父の亡くなった後の12年間、一人暮らしを続けてきました。「もう一人暮らしは無理」と自らの意志で介護施設に入居しました。時々、訪問する時に私は家族の立場で施設の様子や職員さんの態度を見ます。家族として私が求めるのは安心と安全、清潔が守られているかという事と何より職員さんが笑顔で丁寧な言葉で母に接してしてくれるのかという事です。また、出来るなら一日に少しの時間でも個人的に会話をして欲しいとも願います。そして、それらはそのまま介護職員として働く上で私がいつも心がけていきたい事でもあります。私たちの仕事は「やさしい時間」を作り出す仕事なのだと思っております。



新人 紹介

石丸寛子(アンジュール)



笑顔を忘れずに、向上心を持って仕事に取り組みたいです。

高市良男(第二)



ジョギングと川柳で、ストレス発散しながら仕事に励んでいます。

中矢時人(小規模)



利用者の気持ちに寄り添うことができる職員を目指して頑張ります。

濱 翔真(小規模)



利用者さんに愛される職員になれるよう一つひとつ丁寧な介護をしていきたいと思ひます。

松比良 圭(この道)



毎日笑顔で初心を忘れず日々皆さんと成長できるようがんばります。

丸山祐子(第二 主任)



いつもニコニコ朗らかに。ともに過ごせるこの時を大切にしたいと思っています。

渡邊 朋(第二)



焦らず、気負わず、怠けず無理せず、ポチポチやってみようと思ひます。

よろしく
お願いします



お願い

お使いになっていない炊飯器がございましたらご寄付ください

お年寄りに、いつでも温かいおしぼり使っていただくために使います。

ご不要になった炊飯器(保温機能が使えるもの)がございましたら、取りに伺いますのでお知らせ下さいませ。

編集後記

寒い冬があるから、春になる喜びを感じられる。とほいうものの毎日寒いと辛くなります。やっぱり、ポカポカと穏やかな春がいいなと思ひませんか？季節も人生も。お年寄りと一足早い春の歌をうたいながら、雨乞いならぬ春乞いをしている今日この頃です。

大窪 (溝)